2024.2.10 GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

生誕200年のブルックナーと没後100年のフォーレを聴く

プログラム

今年はベートーヴェン以後の最も重要な交響曲作曲家のひとり、**アントン・ブルックナー（1824.9.4～1896.10.11）**の生誕200年、また近代フランス音楽の巨匠**ガブリエル・フォーレ（1845.5.12～1924.11.4）**の没後100年に当たります。そこで今回はふたりの偉大な作曲家の名曲でお楽しみください。

アントン・ブルックナーは1824年、オーストリアのアンスフェルデンで学校教師の長男として生まれました。農民的な幼時を過ごしますが、楽才を持った父のもとで、10歳の頃には礼拝でオルガンを弾かされ、音楽家でオルガン奏者でもあったヴァイスに和声の基本やオルガン奏法を学びました。1837年に父が亡くなった後、聖フローリアン修道院の少年聖歌隊員に加わり、修道院の国民学校で学業を続けながら、オルガン奏者のカッティンガーからも教えを受けました。学習課程修了後、教員となり、1843年リンツ近いエンス湖畔のクローンスドルフに住み、授業の傍ら作曲家でオルガニストのツェネッティから音楽理論や鍵盤楽器を学びました。この頃に最初の小さなミサ曲や合唱曲が作曲されています。1848年に聖フローリアン修道院のオルガン奏者、1856年にはリンツ大聖堂のオルガニストに任命されました。教師の生活を捨て音楽家として立つことを決心したブルックナーは1855年から1861年までウィーンで有名な理論家ゼヒターから和声法と対位法を学び、さらに1861年にはリンツ劇場の楽長オットー・キッツラーから楽式論や管弦楽法を学び、1863年交響曲ヘ短調を作曲すると、それ以降多くを交響曲の作曲に費やし、生涯11曲の交響曲を書きました。1896年ウィーンで72年の生涯を閉じたブルックナーは、長大な交響曲を数多く作曲したマーラーと常に比較され、人気を二分する交響曲の大家として名を残しています。

ガブリエル・フォーレは1845年、フランス南部のパミエで生まれました。父は教師となりましたが、家系には音楽家はいませんでした。たまたま少年時代にハーモニウムを独力で即興的に弾く異常な楽才に気付いた婦人が父親に進め、1854年パリのニデルメイェール音楽学校に入学しました。1860年からはサン=サーンスがピアノの教師となり、ピアノ以外にも多くの音楽的教養を伝授され、ふたりは師弟を超えた深い友情で結ばれることになりました。作曲は音楽学校時代から始まり、1865年20歳の時に「ラシーヌ賛歌」で作曲の一等賞を取って卒業しました。その後は教会のオルガニスト、ニデルメイェール音楽学校の教師を経て、1896年にはマドレーヌ大聖堂の首席オルガニストに任命され、さらにパリ音楽院の作曲科教授となり、教室からはラヴェル、デュカス、フローラン・シュミットらを生み出しました。1903年頃から耳が次第に聞こえなくなってきますが、作曲には新たな境地を開いて行き衰えを見せませんでした。1905年パリ音楽院の院長に就任、改革を進めて行きますが、視覚が失われた1920年に院長を退任、弦楽四重奏曲を完成させた後1924年11月4日、79歳で世を去りました。（中川）

＊＊＊＊＊＊＊

ガブリエル・フォーレ（1845～1924）：

歌曲“イスファハンのばら”Op.39の4

フレデリカ・フォン・シュターデ（メゾ・ソプラノ）／マーティン・カッツ（ピアノ）
（1986.8.18 ザルツブルク祝祭大劇場でのLive　～ザルツブルク音楽祭～）

歌曲“月の光”Op.46の2

テレサ・ベルガンサ（メゾ・ソプラノ）／アアン・アントニオ・アルパレス・パレーホ(ピアノ)
（1995.4.30 シュヴェチンゲン、リンカーツィーケルでのLive　～シュヴェチンゲン音楽祭～）

歌曲“夢のあとに”Op.7の1

バーバラ・ヘンドリクス（ソプラノ）／スタファン・シャイヤ（ピアノ）
（1987.12.8 東京文化会館大ホールでのLive））

バラード嬰ヘ長調Op.19

パスカル・ロジェ（ピアノ）／シャルル・デュトワ指揮モントリオール交響楽団
（1993.9.18　ウィルフリッド・ペルティエホールでのLive）

組曲“ペレアスとメリザンド”Op.80

アルミン・ジョルダン指揮スイス・ロマンド管弦楽団
（1991.11.17　サントリーホールでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

アントン・ブルックナー（1824～1896）：

交響曲第7番ホ長調（ハース版）

ギュンター・ヴァント指揮北ドイツ放送交響楽団
（1999.8.27　リューベック音楽会議場でのLive　～シュレスビヒ・ホルシュタイン音楽祭～）

★ホームページアドレス　http://gewandhaus.sakura.ne.jp/wp/

曲　目　解　説

フォーレ：歌曲“イスファハンのばら”作品39の４

1884年に書かれたフランスの詩人、ルコント・ド・リールの詞による歌曲。去ってしまつた恋人をバラ、ジャスミン、オレンジなどの香り高い花にたとえた詞に、情緒に満ちた香りが漂ってくるような響きの妙にフォーレならではの魅力があります。

むした枝に咲くイスファハンのバラも　モスルのジャスミンも　オレンジの花さえも　こんなに素敵な香りはしない
甘い匂いはしない　おお、純白のレイラよ　おまえの軽やかな息遣いほどには
おお、レイラよ、軽やかに飛び去ってしまった　甘いくちづけをくれたおまえの唇を失ってからは
もはややつれたオレンジの木も香ることはなく　苔むしたバラからも、かぐわしい匂いはしなくなった
おお、軽やかな蝶のような若々しいおまえの愛がすばやく、柔らかい羽で私の心に舞い戻ってきてくれたなら
そしてまたオレンジの木の花の香りが苔むした枝に咲くイスファハンのバラの匂いが戻ってきてくれたなら（中間省略）

フォーレ：歌曲“月の光”作品46の２

1887年作曲のフランス象徴主義の詩人、ポール・ヴェルレーヌの詞による歌曲。フォーレの歌曲の中では最も親しまれている名曲で、ひとつの小品のように奏でるピアノは特に印象的です。

君の心は選りすぐりの風景画だ　その中でとりどりの仮面をつけて魅惑的な衣装をまといリュートを弾き、踊りながら
歩く人々は奇抜な仮装の下で何故か悲しげにみえる
愛の勝利や成功した人生を短調で歌う彼らは　しかし自らの幸せを信じているようでもなく　その歌声は月の光に溶けて
ゆく梢の鳥たちに夢見させ　大理石の彫像の間のしなやかな噴水を恍惚とすすり泣かせる悲しげで美しい月の光の中に

フォーレ：歌曲“夢のあとに”作品７の１

1878年頃作曲されたフランスの詩人で、パリ音楽院声楽家の教授でもあったロマン・ビュシーヌの詞による歌曲で、フォーレの歌曲の中では最も良く知られ、美しい旋律はチェロをはじめ多くの楽器で演奏されています。フォーレの初期を代表する名曲です。

君の姿が魅了するまどろみの中　ぼくは夢見てた　幸せを、燃え上がる幻影を
君の瞳は優しく、君の声は澄んで響き　君は光り輝いてた、朝焼けに照らされる空のように
君はぼくを呼び、そしてぼくはこの地上を離れて　君と一緒に飛び立ったのだ　光に向かって
空はぼくたちのために雲の扉を開き未知なる栄光が、神々しい　光がほのかに見えた
ああ！ああ！悲しい夢からの目覚め　ぼくはお前を呼ぶ、おお夜よ、ぼくに返してくれ　お前の偽りの幻を
戻れ、戻ってくれ、輝きよ　戻れ、おお　神秘の夜よ！

フォーレ：バラード嬰ヘ長調作品19

バラード嬰ヘ長調は1879年に最初ピアノ曲として作曲されましたが、これをフォーレ自身が1881年に管弦楽伴奏の形に編曲しました。その年の４月に国民音楽協会（フランス音楽と新進作曲家を世に広めるために設立された文化団体）の演奏会で、フォーレ自身の独奏、エドゥアール・コロンヌの指揮で初演され、曲はサン=サーンスに献呈されました。切れ目なく演奏される３つの部分からなり、優美で若々しい抒情にあふれた佳曲です。この曲を弾いてみたリストが、途中で「これ以上指がない」と叫んだという逸話が残っています。

フォーレ：組曲“ペレアスとメリザンド”作品80

フォーレは、ベルギーの象徴主義の詩人・劇作家、メーテルリンクの戯曲「ペレアスとメリザンド」を、1898年6月にロンドンのプリンス・オブ・ウェールズ劇場で行なわれたジャック・マッケイの英語版による上演のための付随音楽として作曲しました。しかし、上演一ケ月前の急な仕事だったため、ピアノで作曲し、オーケストレーションはフォーレの細かい指示のもと愛弟子のシャルル・ケックランが行ないました。全5幕19曲から、フォーレは後年組曲を作るため、**「前奏曲」**、**「紡ぐ女」**、**「メリザンドの死」**の3曲を選び、1901年2月にコンセール・ラムルーで初演しました。さらにその後、オーケストラ編成を大きくし、**作品78**として完成していた**「シシリエンヌ」**を加えた4曲が1908年に出版されました。今日、通常演奏されるのはこの版によるものです。精妙、繊細な美しさを持った名曲です。

１．前奏曲　２．紡ぐ女　３．シシリエンヌ　４．メリザンドの死

ブルックナー：交響曲第７番ホ長調

ブルックナー57歳の1881年9月に着手、第3楽章、第1楽章、第2楽章の順に進められ、1883年9月に第4楽章を書きあげて完成しました。初演は1884年12月30日にライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と当時29歳、のちに大指揮者となるアルトゥール・ニキシュの指揮で行なわれました。その後1885年3月にミュンヘンで演奏したり、この曲に尽力した指揮者ヘルマン・レヴィの推薦により、曲はバイエルン国王ルートヴィヒ2世に献呈されました。この交響曲を作曲している途中の1883年2月13日に敬愛するワーグナーがこの世を去り、ブルックナーは第2楽章に追悼の気持ちを金管の響きによって表現し、反映させました。4本のワーグナー・チューバを用い、ホルンの数も増したことでスケールは大きくなり、また抒情的な美しさと豊かさを持っている事から、ブルックナーの交響曲の中では最も演奏される機会が多く、人気の高い名曲です。ブルックナーの交響曲はしばしば改訂が行なわれた結果、複数の版や稿が存在しますが、第7番は自身の改訂はありません。しかし自筆稿に後から加えられた部分があり、これを取り除いて出版したハース版と、元に戻したノヴァーク版が存在しますが、ヴァントはハース版で演奏しています。

第１楽章　アレグロ・モデラート　　第２楽章　アダージョ ― きわめて荘厳に、きわめてゆるやかに
第３楽章　スケルツォ ― きわめて急速に　第４楽章　快速に、しかし速すぎずに